

三 村 城 跡

一般県道飯岡石岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月

茨城県土浦土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第299集

み むら じょう あと
三 村 城 跡

一般県道飯岡石岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月

茨城県土浦土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景（南方向から）



遺跡全景（南東方向から）

序

茨城県は、市町村や県の枠を越える広域的な交通と地域の連携を生かした県全域にわたる調和のとれた発展と振興を図るため、県土の均衡ある発展を支える基盤として、一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めております。

その一環として、茨城県土浦土木事務所は、石岡市三村地区において、一般県道飯岡石岡線道路改良事業を計画いたしました。

この事業予定地内には三村城跡が所在することから、財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所から同遺跡発掘調査について委託を受け、平成18年4月1日から平成18年5月31日まで実施しました。

本書は、三村城跡の調査成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために利用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県土浦土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、石岡市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。


平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見 實 徳

例 言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成18年度に発掘調査を実施した、茨城県石岡市大字三村1910-1番地ほかに所在する三村城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成18年4月1日～平成18年5月31日
整 理 平成20年1月1日～平成20年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 川 村 満 博
主任調査員 栗 田 功
主任調査員 松 本 直 人
- 4 整理及び本書の執筆・編集は整理課長村上和彦のもと、以下の者が担当した。
主任調査員 栗 田 功

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、X軸 = +16,800m、Y軸 = +40,040mの交点を基準点（A 1a1）とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。
- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。
遺構 SI - 住居跡 SK - 土坑 SD - 堀跡・溝跡 P - 柱穴 SX - 不明遺構 K - 攪乱
遺物 P - 土器 TP - 拓本土器 DP - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品
土層 K - 攪乱
- 3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 4 遺構及び遺物実測図の記載方法については次のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は300分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。
 - (3) 遺構及び遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

● 土器片 ○ 土製品 □ 石器・石製品 硬化面 -----
- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。
 - (1) 計測値の単位は、m・cm、kg・gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は [] を付して示した。
 - (2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器片、土製品、石器・石製品、金属製品ごとに通し番号とし、本文・挿図・写真図版を記した番号も同一である。
- 6 「主軸」は、竪穴住居については炉または竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を記した。「主軸方向」は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

抄 録

ふりがな	みむらじょうあと							
書名	三村城跡							
副書名	一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第299集							
著者名	栗田 功							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587							
発行日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
三村城跡	茨城県石岡市 大字三村1910-1 番地ほか	08205 - 176	36度 09分 00秒	140度 16分 44秒	24m	20060401 ～ 20060531	1,191㎡	一般県道飯岡石岡線道路改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
三村城跡	集落跡	縄文	堅穴住居跡	3軒	縄文土器、石器(石斧、石皿、 敲石)、貝(シオフキ・ウミニナ)			
			袋状土坑 土坑 地点貝塚	4基 1基 1か所				
	城跡	中世	堀跡	1条	土師質土器(内耳鍋)、石製品(五輪塔)			
			土坑	4基	陶磁器(碗、搦鉢、甕) 石器(砥石)			
	その他	時期不明	土坑 溝跡 不明遺構	17基 2条 2か所	陶磁器(皿、碗、搦鉢)			
要約	三村城は、府中大塚氏の一族、三村常春の居城で、現在の三村小学校の敷地一帯がその主郭である。今回の調査区は、主郭の南西部にあたり、三郭と考えられる郭の南端部である。調査区からは、東西に延びる堀跡が確認された。堀跡からは、中世の五輪塔の一部や近世の陶磁器片が出土している。中世以前では、縄文時代中期の堅穴住居跡や袋状土坑、古墳時代中期の堅穴住居跡が確認されている。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	7
1 縄文時代の遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 袋状土坑	11
(3) 土坑	18
(4) 地点貝塚	19
2 古墳時代の遺構と遺物	19
(1) 竪穴住居跡	19
(2) 土坑	21
3 中世の遺構と遺物	22
堀跡	22
4 近世・近代の遺構と遺物	24
土坑	24
5 その他の遺構と遺物	28
(1) 土坑	28
(2) 溝跡	31
(3) 不明遺構	32
(4) 遺構外出土遺物	33
第4節 まとめ	35
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県土浦土木事務所は、石岡市三村地区において、一般県道飯岡石岡線の道路改良事業を進めている。

平成17年2月18日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年10月13日に現地踏査を、平成17年11月4日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成17年11月18日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、事業地内に三村城跡が所在する旨及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成18年1月26日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成18年2月10日、茨城県土浦土木事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成18年2月16日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道飯岡石岡線道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成18年2月22日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、三村城跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

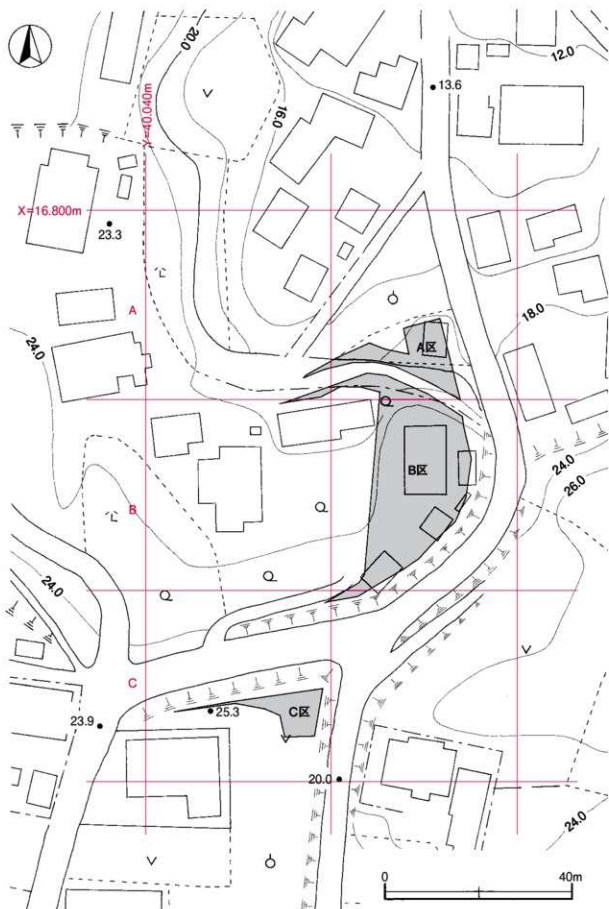
財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成18年4月1日から平成18年5月31日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

三村城跡の調査は、平成18年4月1日から平成18年5月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

(平成18年4月1日から平成18年5月31日)

期間	4月			5月		
工程						
調査準備 表土除去 遺構確認	■					
遺構調査		■	■			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■	■	
補足調査 撮 取						■



第1図 三村城跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

三村城跡は、茨城県石岡市大字三村1910-1番地ほかに所在している。

石岡市は県中央部のやや南西に位置し、西端は筑波山塊、南東端は霞ヶ浦にそれぞれ接している。市街地は、市域の北側を東流して霞ヶ浦に流入する園部川と中央の恋瀬川に挟まれた、石岡台地に位置している。園部川、恋瀬川の周辺には沖積低地が形成され、水田地帯となっている。

当遺跡の位置する出島台地は、恋瀬川を挟んだ石岡台地の南側にあたり、霞ヶ浦の霞ヶ浦入と高浜入に挟まれている。現在は、一帯が水郷・筑波国定公園の中心にあたる。

地質は、基盤となる手野層があり、その上に成田層、さらに龍ヶ崎層、常総粘土層、関東ローム層が重なっている¹⁾。

三村城跡は、恋瀬川右岸の標高24mの出島台地上に位置し、恋瀬川流域から複雑に入り込んだ支谷に挟まれた舌状台地上に立地している。三村小学校周辺一帯が城跡とされており、小支谷によって細分された舌状台地先端部が一郭・二郭と考えられ、南西から延びる台地尾根先端部に三郭がそれぞれ立地している。調査区は、台地尾根に続く三郭と考えられる郭の南端部で、調査前の現況は宅地及び畑である。

第2節 歴史的環境

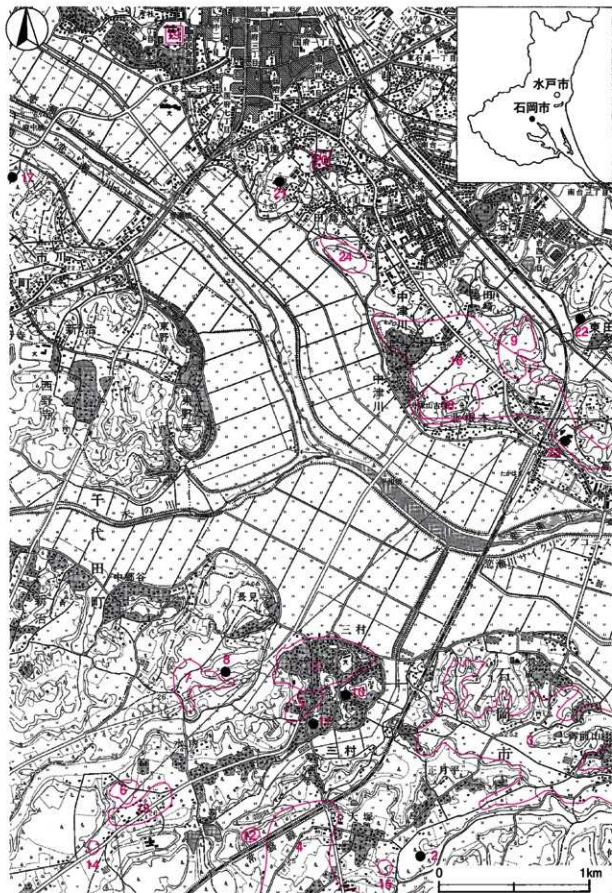
恋瀬川の兩岸は、古くから生活の場として適しており、旧石器時代以来遺跡の分布が多く認められる。ここでは三村城跡周辺に位置する恋瀬川流域の主な遺跡について時代を追って記述する。

旧石器時代の遺跡としては、三村の正月平遺跡(2)が知られている。ナイフ形石器の出土が確認されており、市内最古と考えられている²⁾。さらに常陸風土記の丘建設に伴う発掘調査が実施された宮平遺跡からは、頁岩製のナイフ形石器が出土³⁾し、十三塚C遺跡からも石刃が採集されている⁴⁾。これらの遺跡は、恋瀬川流域の台地上に分布しているが、遺跡の性格等についての詳細は不明である。

縄文時代の遺跡は、早期から後期にかけて確認されている。下ノ宮遺跡(3)、向原遺跡(4)、宿平遺跡(5)、姥神遺跡(6)、地蔵平遺跡(7)、地蔵窪貝塚(8)、新田遺跡、楨瀬遺跡(9)など多くの遺跡は、恋瀬川河口に形成された沖積低地を望む舌状台地上に分布している。宮平遺跡では、石組が有する住居跡や土坑が確認され、中期や後期の土器が出土し⁵⁾、白久台遺跡では、袋状土坑群が確認されている⁶⁾。

弥生時代の遺跡は、宮平遺跡、銀鬼塚遺跡、新池台遺跡、外山遺跡などが周知されている。外山遺跡は12軒の堅穴住居跡が検出された後期の集落跡で、下稲吉式土器が出土し、茨城県の弥生研究に重要な資料を提示している⁷⁾。

古墳時代にも、集落跡や古墳など多くの遺跡が確認されている。古墳は、吹上古墳(10)、古道古墳(11)、下屋敷古墳群(12)、水内古墳群(13)、箕輪前古墳群(14)、小別当古墳群(15)、舟塚山古墳群(16)など132基の古墳が周知されている。舟塚山古墳群の主墳舟塚山古墳は、国指定史跡に指定されている県内最大の方後円墳であり、5世紀中葉の築造と考えられている。被葬者は、霞ヶ浦沿岸や恋瀬川流域を支配し、中央政権とも関係の深い茨城国造筑紫刀禰と想定されている⁸⁾。主な集落の遺跡としては、当財団が発掘調査した



第2図 三村城跡周辺遺跡分布図(国土地理院「石岡」常陸高浜)1:25,000

石岡別所遺跡⁹⁾(17)、宮久保遺跡¹⁸⁾(18)などがある。

奈良時代になると律令体制が確立し、常陸国の国府は『和名抄』に「常陸国府、在茨城郡、行程上三十日、下十五日」とあるように、茨城郡に置かれた。石岡市教育委員会による平成18年10月の常陸国街跡第6次発掘調査では東脇殿が発見され、常陸国街跡(19)内にはいくつかの官衙城が形成されていたことが判明し、常陸国庁の広大さが確認された⁹⁾。この他にこの流域には、常陸国分寺跡・尼寺跡をはじめとして、鹿の子遺跡、茨城廃寺跡(20)、茨城郡街跡(21)などがあり、古代常陸国の中心として形成されていく。鹿の子遺跡は、国衙文書など常陸国の国勢の一端を知る貴重な漆紙文書が多数発見された遺跡として注目されている。

律令体制が崩壊し中世になると、治安が乱れて武家が台頭し、各地で勢力争いがおこり、防御施設の城郭築造が各地で行われる。南北朝、室町時代には、大掾詮国が現在の石岡小学校所在地に府中城を移し、出城といわれている大隅要害・小井戸要害・高野浜城(22)・高浜要害(23)、三村要害、三村城などを築いた¹⁰⁾。中世末になると、小田氏との抗争、さらに佐竹氏の南下策によって大掾氏は滅亡する¹¹⁾。その為、佐竹領となった府中石岡は、佐竹義宣が秋田に国替えになった慶長7(1602)年以降、六郷氏や菅川氏、そして天領時代の官松下八太夫の支配を経て、元禄13(1700)年、初代水戸藩主徳川頼房の五男松平頼隆が藩主となって府中松平藩が成立する。

※文中の〈 〉内の番号は、第2図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 石岡市文化財関係資料編纂会『石岡市の遺跡—歴史の里の発掘100年史—』1995年3月
- 3) 石岡市史編さん委員会『石岡の歴史』1984年11月
- 4) 註2)文獻に同じ
- 5) 註2)文獻に同じ
- 6) 註2)文獻に同じ
- 7) 註3)文獻に同じ
- 8) 後藤孝行『石岡別所遺跡 一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』[茨城県教育財団文化財調査報告]第244集 2005年3月
- 9) 箕輪健一『常陸国街の調査とその成果』『常陸の歴史』第35号 書房出版株式会社 2007年2月
- 10) 石岡市史編纂委員会『石岡市史上巻』1979年2月
- 11) 註3)文獻に同じ

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図(地名編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月

表1 三村城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳
①	三村城跡	○					13	水内古墳群			○		
2	正月平遺跡	○					14	箕輪前古墳群			○		
3	下ノ宮遺跡	○	○				15	小別当古墳群			○		
4	向原遺跡	○		○	○	○	16	舟塚山古墳群			○		
5	宿平遺跡	○				○	17	石岡別所遺跡	○	○	○	○	○
6	榎神遺跡	○	○	○	○		18	宮久保遺跡	○		○	○	○
7	地蔵平遺跡	○	○	○	○	○	19	常陸国街跡			○		
8	地蔵窪貝塚	○	○	○	○		20	茨城廃寺跡			○		
9	榎原遺跡	○	○	○	○		21	茨城郡街跡			○		
10	吹上古墳						22	高野浜城跡					○
11	古道古墳						23	高浜要害					○
12	下屋敷古墳群			○			24	田島遺跡			○	○	○

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

三村城跡は、石岡市の南東部に位置し、恋瀬川右岸の標高24mの出島台北端部に立地している。現在の三村小学校を中心とする周辺一帯が城跡と考えられており、今回の調査は、三郭と考えられる台地平坦部の南端で、調査面積は1,191㎡である。また、当遺跡は、縄文時代、古墳時代、中世、近世・近代の複合遺跡であり、調査前の現況は、宅地及び畑地である。

確認された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3軒、袋状土坑4基、土坑1基、地点貝塚1か所、古墳時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基、中世の堀跡1条、近世以降の土坑4基、時期不明の溝跡2条、土坑17基、不明遺構2か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に15箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（埴、高坏、甕）、土師質土器（内耳鍋）、陶器（壺、碗、播鉢）、石器（石斧、石皿、敲石、砥石）、石製品（五輪塔）、貝（シオフキ、ウミニナ）などである。

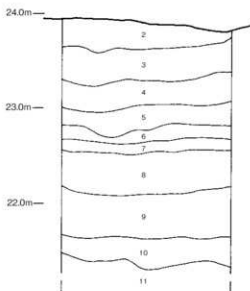
第2節 基本層序

テストピットは、調査B区のB2f5区に設定し、第3図に示すような基本土層の堆積状況を確認した。

テストピットは表土除去後の調査区内に設置したため、第2層から図示した。なお、遺構は第2層の上面で確認した。

第1層は暗褐色の表土で、層厚は最大で、22cmである。

第2層は明褐色のソフトローム層で、層厚は約36cmである。



第3図 基本土層図

第3層はふい褐色のローム層で、ハードローム層への漸移層である。層厚は約38cmである。

第4層は橙色のハードローム層で、層厚は約34cmである。

第5層はふい褐色のハードローム層で、層厚は約26cmである。

第6層はふい褐色の第2黒色帯で、層厚は約18cmである。

第7層は鹿沼バミスと白色粒子を微量含む明褐色のハードローム層で、層厚は約14cmである。

第8層は灰褐色の砂質粘土層で、層厚は約47cmである。

第9層はふい褐色の砂質粘土層で、層厚は約52cmである。

第10層はふい褐色の砂質粘土層で、層厚は約34cmである。

第11層以下は明褐色の常粘粘土層で、層厚は不明である。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

竪穴住居跡3軒、袋状土坑4基、土坑1基、地点貝塚1か所が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

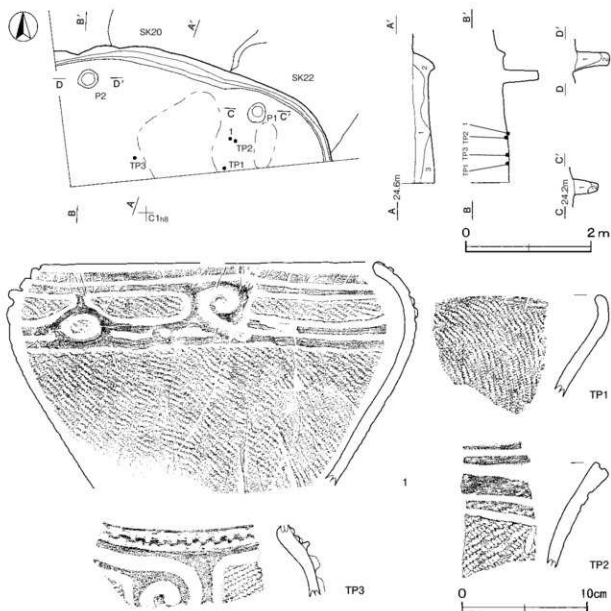
(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡（第4図）

位置 調査C区南部のC1g8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第20～22号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南部と西部が調査区域外へ延びているため、長径は4.18m、短径は2.18mだけが確認された。確認された範囲が狭いため平面形は明確でないが、円形もしくは楕円形と推定され、主軸方向はN-83°-Eで



第4図 第3号住居跡・出土遺物実測図

ある。壁高は12cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P1周辺が踏み固められている。壁溝は、確認された範囲を周回している。

ピット 2か所。P1・P2は深さ40cm・56cmで、規模と位置から柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック少量

覆土 3層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片107点が出土している。出土した土器は、覆土上層から下層にかけて投棄された状態で出土している。1、TP1・TP2は東部、TP3は西部覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表（第4図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[26.7]	(17.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部沈輪が沿う隆帯による渦巻き文と区別文。地文は単節縄文LR縷文	覆土下層	30% PL6
TP1	縄文土器	深鉢	-	(8.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文LR縷文	覆土下層	PL8
TP2	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英	赤褐	普通	口唇部及び口辺部に沈輪。地文は単節縄文LR縷文	覆土下層	PL8
TP3	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部に交互斜交文による連続「コ」字文と沈輪が沿う隆帯による渦巻き文	覆土下層	PL8

第4号住居跡（第5図）

位置 調査C区中央部のC1f8区で、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第19・20・22号土坑、第1号地点貝塚を掘り込み、第2号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径4.20mほどの円形で、主軸方向はN-73°-Wである。壁高は5cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部から東壁寄りに位置している。長径68cm、短径52cmの楕円形で、床面を7cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック少量 2 暗赤褐色 ロームブロック中量

ピット 4か所。P1～P4は深さ12～53cmで、規模と位置から柱穴である。

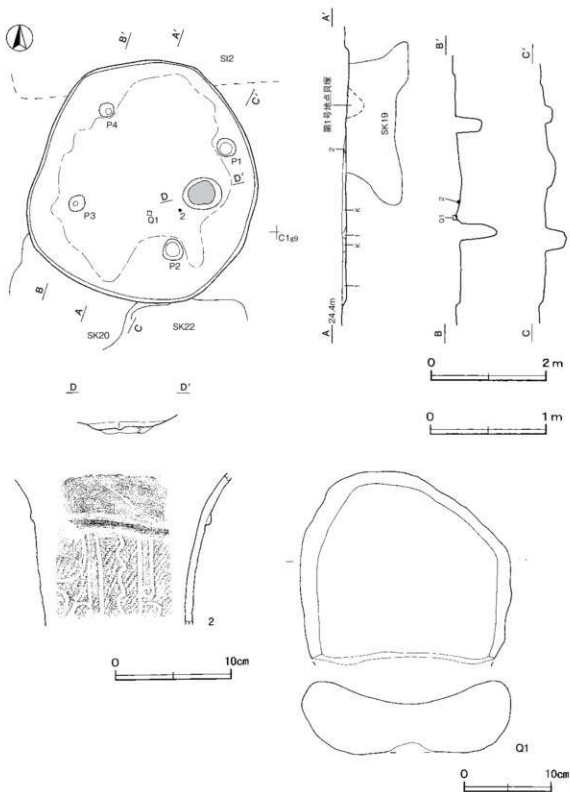
覆土 2層からなる。覆土が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片42点が出土している。2、Q1は南部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第5图 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	-	(13.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部無文帯と胴部の間に隆帯が同 胴部地文は単節縄文R1編文	南部床面	30% PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石皿	(22.2)	24.0	9.4	(6.0)	花崗岩	表面に摩擦による皿状のくぼみ	南部床面	PL10

第5号住居跡 (第6図)

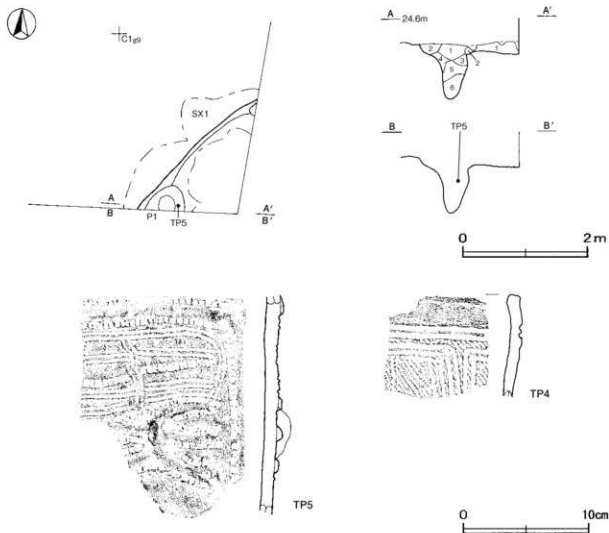
位置 調査C区南東部のC1g9区。標高24.0mほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第1号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 東部と南部は調査区域外へ延びており、長軸は1.85m、短軸は1.55mが確認され、主軸方向はN-10°-Eである。直線状に壁が確認されていることから方形と考えられる。確認された壁高は15cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際以外は踏み固められている。

ピット 深さ76cmで、位置から柱穴と推定される。



第6図 第5号住居跡・出土遺物実測図

覆土 6層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック中量	5	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片85点が覆土中に散在して出土している。TP4は覆土中、TP5はP1覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP4	縄文土器	深鉢	-	(8.2)	-	長石・石英・雲母	暗褐	普通	口辺部2条一組の沈曲により文様を抽出 遺文は平部縄文と類似	覆土中	PL.8
TP5	縄文土器	深鉢	-	(17.4)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	三つ部の象形文 隆帯に沿って角隅文と2対の角隅文を施文	P1覆土中層	PL.8

表2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な 出土遺物	時代	備考 重複関係 (古→新)	
								柱穴	出入口 ビット	炉	貯蔵穴					
3	C1g8	N-83°-E	[円形・ 楕円形]	(4.18×2.18)	12	平坦	周囲	2	-	-	-	-	人為	縄文土器片	中期後葉	SK20→SK22→本跡
4	C1f8	N-73°-W	[円形]	4.20	5	平坦	-	4	-	-	1	-	不明	縄文土器片	中期後葉	SK19→SK20→ SK22→本跡→SI2
5	C1g9	N-10°-E	[方形状]	(1.85×1.55)	15	平坦	-	1	-	-	-	-	人為	縄文土器片	中期中葉	本跡→SI1

(2) 袋状土坑

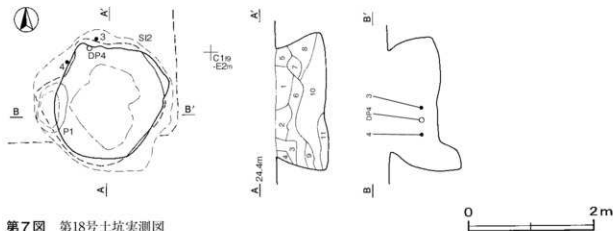
第18号土坑（第7～9図）

位置 調査C区北東部のC1f9区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、長径1.84m、短径1.65mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、中央部が硬化した径2.30mほどの円形である。確認面からの深さは85cmで、壁は底面から内傾して立ち上がっている。西壁際にビット1か所が位置しており、深さは36cmである。

覆土 11層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。



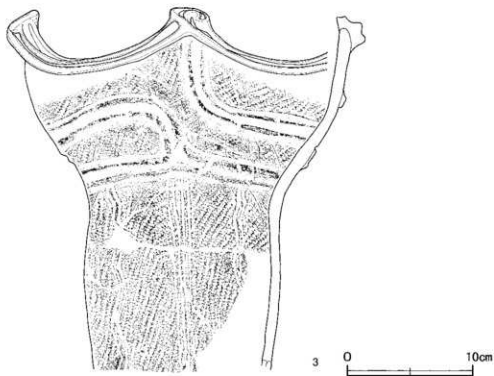
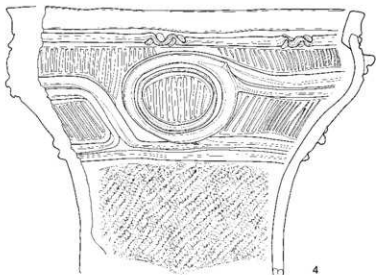
第7図 第18号土坑実測図

土層解説

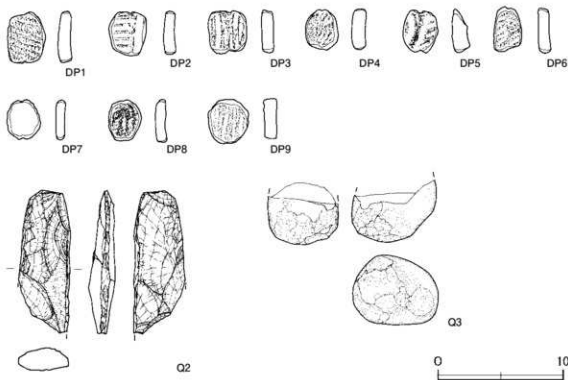
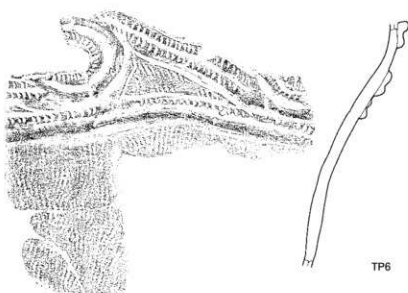
- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 10 暗 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 5 黒 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 11 褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片429点、土製品9点（土器片鉢8・土器円盤1）、石器2点（打製石斧・敲石）が、覆土上層から下層にかけて散在した状況で出土している。3・4、DP4は、北側の覆土下層から、TP6、DP1～DP3・DP5～DP9、Q2・Q3は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第8図 第18号土坑出土遺物実測図(1)



第9図 第18号土坑出土遺物実測図(2)

第18号土坑出土遺物観察表 (第8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	23.9	(29.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	4単位の波状口縁 波部部は染色文 口辺部は沈線が沿う隆帯により文様を演出 胴部は懸垂文 地文は単節縄文・施文	覆土下層	50% PL.6
4	縄文土器	深鉢	[28.6]	(21.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部は沈線が沿う隆帯で円形や楕円形の区画文 区画内に縦位の太い沈線 胴部地文は単節縄文・施文	覆土下層	30% PL.6
TP6	縄文土器	深鉢	-	(19.6)	-	長石・石英・雲母	暗褐	普通	口辺部斜みを有する隆帯により文様を演出 地文は単節縄文・施文	覆土中	PL.6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	現存率 (%)	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
DP1	土器片鏟	4.1	3.1	1.1	184	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	覆土中	PL.9
DP2	土器片鏟	3.5	3.1	1.0	134	100	長軸両端に挟り入り部を作出 沈線文	覆土中	PL.9
DP3	土器片鏟	3.5	3.1	1.0	132	100	長軸両端に挟り入り部を作出	覆土中	PL.9
DP4	土器片鏟	3.2	2.6	1.2	100	100	長軸両端に挟り入り部を作出	覆土下層	PL.9
DP5	土器片鏟	3.4	2.7	1.4	124	100	長軸両端に挟り入り部を作出 隆帯と沈線文	覆土中	PL.9
DP6	土器片鏟	3.6	2.3	0.9	112	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	覆土中	PL.9
DP7	土器片鏟	3.2	2.7	0.7	72	100	長軸両端に挟り入り部を作出 無文	覆土中	PL.9
DP8	土器片鏟	3.3	2.7	0.9	91	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	覆土中	PL.9
DP9	土器片円盤	3.5	3.2	1.1	153	100	周縁部を研磨 無節縄文R	覆土中	PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	打製石斧	(11.3)	4.1	2.1	(102.5)	粘板岩	両面調整 刃部欠損 側面と両側縁の一部に研磨痕	覆土中	PL.10
Q3	敲石	(4.9)	6.7	5.7	(199.0)	砂岩	先端部に敲打痕	覆土中	PL.10

第19号土坑 (第10・11図)

位置 調査C区中央部のC1f8区、標高24.0mほどの台地縁部に位置している。

重複関係 第4号住居に掘り込まれている。第1号地点貝塚は、第1層の埋没過程で堆積している。

規模と形状 開口部は、長径1.84m、短径1.62mの不整楕円形である。底面は径2.70mほどの円形で、中央部は長径0.86m、短径0.59mの楕円形状、高さ13cmほどの高まりが確認された。深さは98cmで、壁は底面から内傾して立ち上がっている。

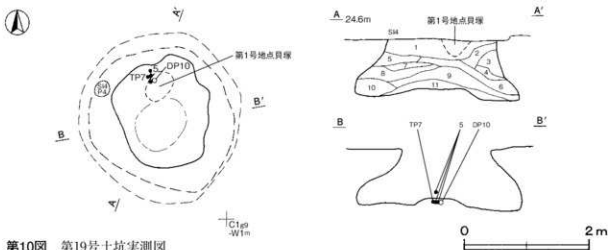
覆土 11層からなり、ロームブロックを含む堆積状況から人為堆積である。

土層解説

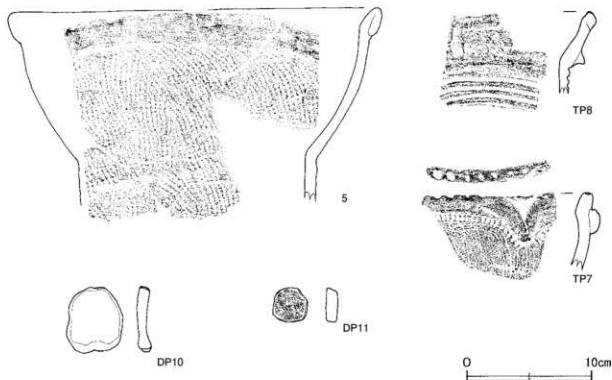
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 明褐色 | ロームブロック多量 | 10 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 11 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片445点、土製品2点(土器片鏟)が、散在した状況で覆土上層から下層にかけて出土している。5、TP7、DP10は北側の覆土下層、TP8、DP11は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第10図 第19号土坑実測図



第11図 第19号土坑出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
5	織文土器	深鉢	[29.1]	(15.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部無文 外面単部織文R.L.施文	覆土下層	10% PL.6
TP7	織文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口辺部にV字文を附付 隆帯に沿って有部沈線文と沈線文施文	覆土下層	PL.8
TP8	織文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯に断面三角形の隆帯と太い沈線施文	覆土中	PL.8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	現存率 (%)	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
DP10	土器片踵	5.2	4.5	0.8 ~ 1.1	29.3	100	長軸両端に挟り入り部を作出 無文	覆土下層	
DP11	土器片円盤	2.7	2.8	0.9	8.7	100	周縁部を研磨 条線文	覆土中	PL.9

第20号土坑 (第12図)

位置 調査C区北東部のC 1g8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3・4号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、径2.30mほどの円形である。底面はほぼ平坦で、中央部が硬化している。底面は長径2.48m、短径2.00mの楕円形を呈し、長径方向はN-58°-Wである。深さは68cmで、壁は第3号住居によって削平された南部以外が内傾して立ち上がっている。

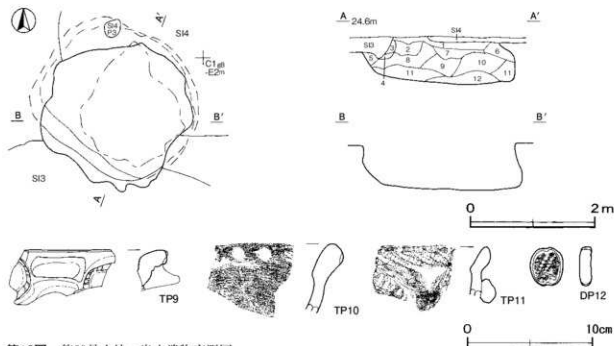
覆土 12層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	11	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片140点、土製品1点（土器片鏃）が覆土上層から下層にかけて散在した状況で出土している。TP9～TP11、DP12は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第12図 第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP9	縄文土器	深鉢	-	(33)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部隆帯に沿って角押文施文	覆土中	PL.8
TP10	縄文土器	深鉢	-	(56)	-	長石・雲母・赤色粒子	黒	普通	口唇部押圧による刻み	覆土中	PL.8
TP11	縄文土器	深鉢	-	(44)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部は単筋縄文RL施文 V字状隆帯貼付	覆土中	PL.8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	現存率 (%)	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
DP12	土器片鏃	3.0	2.5	1.0	99	100	長軸両端に抉り入り部を作出 単筋縄文RL施文	覆土中	PL.9

第22号土坑（第13図）

位置 調査区北東部のC 1g8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3・4号住居に掘り込まれている。

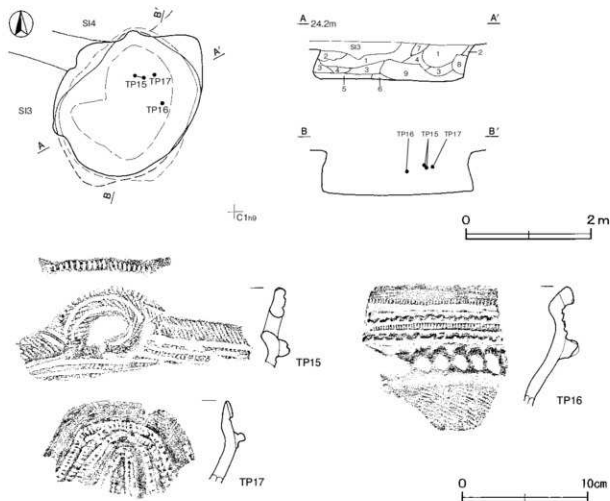
規模と形状 開口部は、長径2.72m、短径2.02mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で、長径は2.44m、短径は1.79mの楕円形を呈し、長径方向はN-2°-Eである。深さは69cmで、北東壁以外は内傾して立ち上がっている。

覆土 9層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	6 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック少量	7 褐 色	ロームブロック中量、炭化物微量
3 黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐 色	ロームブロック中量
4 黒 褐色	ロームブロック微量	9 褐 色	ローム粒子多量
5 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片197点、土製品3点(土器片鏃)が出土している。出土土器のほとんどは細片で、散在した状況で覆土上層から下層にかけて出土している。TP15～TP17は中央部覆土中層から出土している。所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第13図 第22号土坑・出土遺物実測図

第22号土坑出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・雲母	暗赤褐	普通	波頂部の口唇削み 口辺部単節縄文R1施文	覆土中層	PL.8
TP16	縄文土器	深鉢	-	(9.6)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	口辺部削みを有する隆帯と押正文を有する隆帯間に交互に連続刺突文施文	覆土中層	PL.8
TP17	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	波状口縁 隆帯に沿う有筋沈線文	覆土中層	PL.8

表3 袋状土坑一覧表

番号	位置	底部長径方向	底部平面形	規模			壁面	底面	ビット	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				(開口部)長径×短径(m)	(底部)長径×短径(m)	深さ(cm)						
18	C1f9	-	円形	1.84×1.65	2.30	85	内傾	平坦	1	人為	縄文土器片	本跡→SI.2
19	C1f8	-	円形	1.84×1.62	2.70	98	内傾	凸	-	人為	縄文土器片	本跡→SI.4
20	C1g8	N-58°-W	楕円形	2.30	2.48×2.00	68	内傾	平坦	-	人為	縄文土器片	本跡→SI.3・4
22	C1g8	N-2°-E	楕円形	2.72×2.02	2.44×1.79	69	内傾	平坦	-	人為	縄文土器片	本跡→SI.3・4

(3) 土坑

第21号土坑（第14図）

位置 調査C区南部のC1g8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びており、東西1.87m、南北は1.02mが確認され、平面形は円形もしくは楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。深さは37cmである。

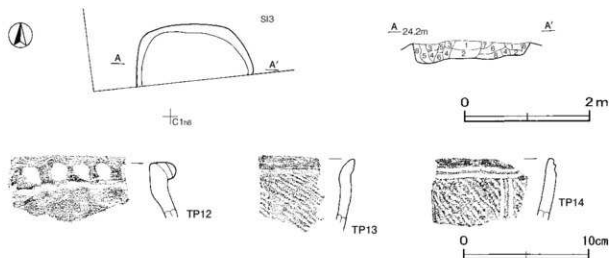
覆土 8層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片65点が出土している。出土土器のほとんどは細片で、散在した状態で覆土上層から下層にかけて出土している。TP12～TP14は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第14図 第21号土坑・出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP12	縄文土器	深鉢	-	(45)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部押圧文	覆土中	PL.8
TP13	縄文土器	深鉢	-	(57)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部無文 口辺部RLの単節縄文	覆土中	PL.8
TP14	縄文土器	深鉢	-	(49)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部2条の沈線文 地文に単節縄文LR施文	覆土中	PL.8

表4 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
21	C1g8	-	[円形・楕円形]	1.87×(1.02)	37	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	本誌→SI.3

(4) 地点貝塚

第1号地点貝塚 (第15図)

位置 調査C区中央部のC1f8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

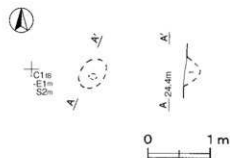
重複関係 第19号土坑の第1層埋没過程で堆積している。

規模と形状 長径0.42m、短径0.25mの楕円形で、長径方向はN-66°-Eである。深さは26cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 黒色の単一層で、混泥土層である。覆土は第19号土坑の第1層と近似している。

遺物出土状況 出土した貝は、シオフキ (74点 152g)、ウミナ (178点 106.5g)、イボニシ (6点 5.6g)、ハマグリ (1点 1.5g)、カワアイ (1点 0.5g) である。

所見 貝は第19号土坑の埋没にもなった廃棄と考えられ、時期は覆土が第19号土坑の第1層と近似していることから、縄文時代と考えられる。



第15図 第1号地点貝塚実測図

表5 地点貝塚一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C1f8	N-66°-E	楕円形	0.42×0.25	26	緩斜	皿状	人為	シオフキ ウミナ	

2 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡1軒、土坑1基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡 (第16図)

位置 調査区C区北部のC1f8区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第4号住居跡、第18・19号土坑を掘り込み、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びている。壁は不明瞭な部分が多いが、北部の一部の壁と、主柱穴の位置から長軸6.10m、短軸は2.56mが確認され、長軸方向はN-81°-Eであり、平面形は方形と考えられる。

床 中央部が踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ76cm・32cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、焼土粒子・ローム粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

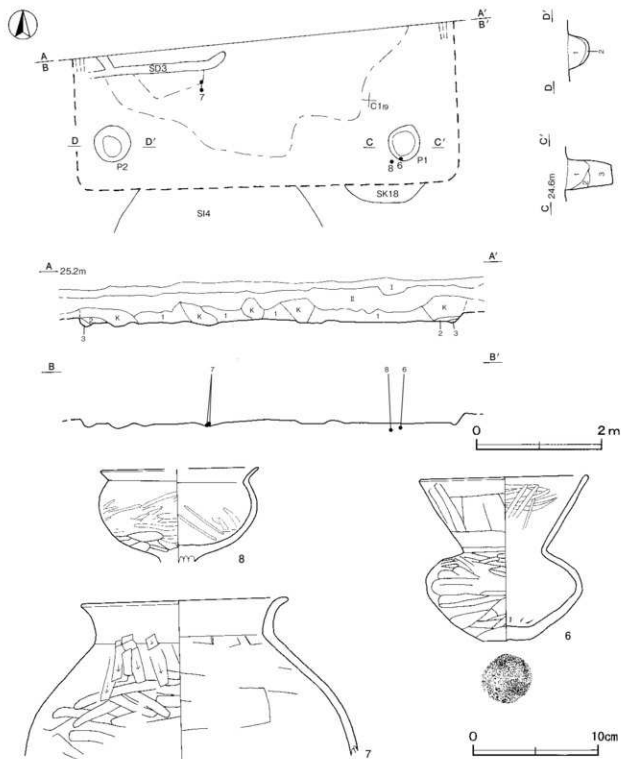
覆土 3層からなる。覆土が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片81点 (埴1・埴25・高埴6・甕49) が出土している。6・8は東部、7は西部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半と考えられる。



第16図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
6	土師器	埴	13.2	13.1	3.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ 口縁部内面ヘラ磨き 体部外面ヘラナデ・ヘラ磨き	床面	90% PL.7
7	土師器	甕	16.0	(12.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ヘラ削り・ ヘラナデ 体部内面ヘラナデ	床面	30% PL.7
8	土師器	台付甕 [12.4]	(7.4)	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ヘラナデ・ ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	60% PL.7

表6 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な 出土遺物	時代	備考 重複関係(古→新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	竪	貯蔵穴				
2	C1f8	N-81°-E	[方形状]	(6.10×2.56)	-	平坦	-	2	-	-	-	-	不明	土師器	中期前半	SI4, SK18・SK19 →本跡→SD3

(2) 土坑

第7号土坑 (第17図)

位置 調査B区中央部のB2d6区、標高24.0mの台地縁部に位置している。

規模と形状 長軸0.90m、短軸0.80mの隅丸方形で、長軸方向はN-28°-Eである。深さは27cm、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

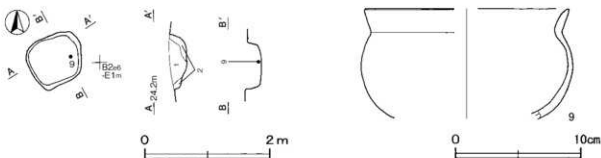
覆土 2層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片36点(坏14・高坏2・甕19・楕1)が出土している。9は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後半と考えられる。



第17図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
9	土師器	小形甕	[16.2]	(8.7)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内・外面厚減調整不明	覆土下層	20% PL7

表7 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
7	B2d6	N-28°-E	隅丸方形	0.90×0.80	27	外傾	平坦	人為	土師器片	

3 中世の遺構と遺物

堀跡1条が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

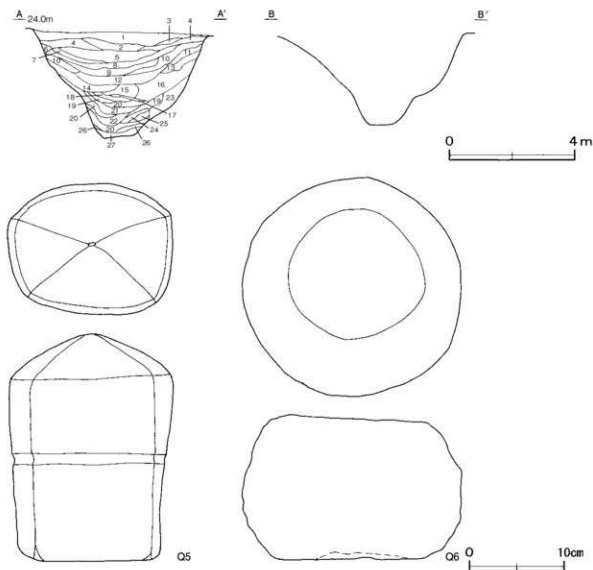
第1号堀跡（第18・19図・全体図）

位置 調査B区南部のB2h2～B2f7区、標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第4・11・23～25号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側と東側の両端が調査区外へ延びており、確認できた長さは20.28mで、上幅5.20～5.96m、下幅0.78～1.04m、深さ2.96～3.48mである。B2h2区から北東方向（N-70°-E）ではほぼ直線的に延び、B2f7区まで続いている。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。断面形は箱菜研の形状を呈している。

覆土 27層からなる。第1層は粘性しまりともに強く、第2層より下の堆積状況は様相が異なり、整地のために埋め戻された土と考えられる。第2～13層は、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。第14層より下の土層は、ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

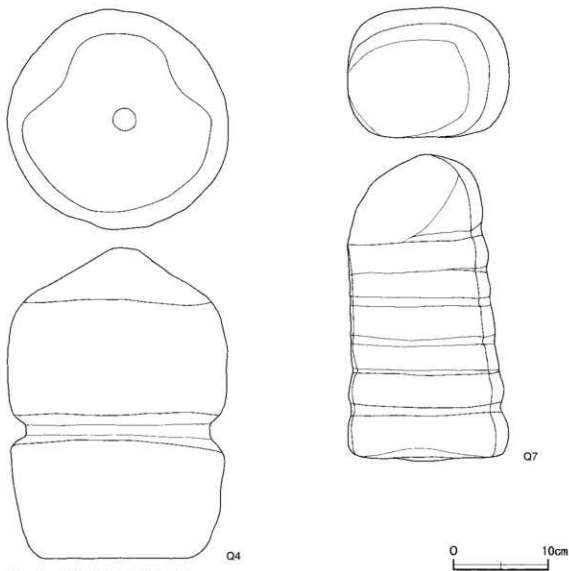


第18図 第1号堀跡・出土遺物実測図

土層解説

1	暗 褐 色	ローム粒子中量	15	にぶい褐色	ロームブロック中量
2	黒 褐 色	ロームブロック少量	16	暗 褐 色	ローム粒子少量
3	灰 褐 色	粘土ブロック・焼土粒子微量	17	灰 褐 色	粘土ブロック中量、ローム粒子微量
4	灰 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	18	灰 褐 色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
5	暗 褐 色	ロームブロック微量	19	褐 色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
6	褐 色	ロームブロック少量	20	褐 色	ロームブロック多量、粘土粒子微量
7	灰 褐 色	粘土粒子少量、ロームブロック微量	21	暗 褐 色	ローム粒子微量
8	灰 褐 色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子微量	22	灰 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量
9	灰 褐 色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量	23	黒 褐 色	ロームブロック中量
10	黒 褐 色	ロームブロック微量	24	明灰褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子微量
11	褐 色	ロームブロック中量	25	橙 色	ローム粒子多量、粘土ブロック微量
12	暗 褐 色	ロームブロック少量	26	暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子微量
13	褐 色	ロームブロック多量	27	にぶい褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
14	暗 褐 色	ロームブロック中量			

遺物出土状況 土師質土器片3点(内耳鍋)、石製品4(五輪塔空風輪部2・五輪塔水輪部1・宝篋印塔相輪部1)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片43点、土師器片60点(坏8・甕51・甌1)、須恵器片2点(甕)、混入した土師質土器片15点(焙烙13・播鉢2)、瓦質土器片3点(焙烙)、陶器片21点(灯明皿2・碗類11・播鉢1・土瓶6・壺1)、磁器片23点(碗類)、土製品1(泥面子)も出土している。Q4～Q7は東部覆土下層



第19図 第1号堀跡出土遺物実測図

から投棄された状態で出土している。

所見 堀跡は、三郭の南東部を東西に延びるように確認された。調査区外の西側は台地端部で北向きに方向を変え、土塁をともなうて延びている痕跡が確認できる。これらのことから、堀は三郭の南側に延びる台地尾根部を掘り切り、南側と西側の防御を固めるための堀といえる。覆土下層からは、16世紀代の五輪塔の一部と宝篋印塔の一部が投棄された状態で出土していることから、堀は三村城廃城後に下部が人為的に埋め戻され、その後徐々に埋没していったと考えられる。

第1号堀跡出土遺物観察表 (第18・19図)

番号	器種	長さ	最大径・幅	最大厚	重量 (kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	五輪塔	32.7	23.2	-	25.5	花崗岩	空・風輪	覆土下層	16世紀中葉 PL10
Q5	五輪塔	23.9	17.2	13.9	8.6	花崗岩	空・風輪	覆土下層	16世紀後葉 PL10
Q6	五輪塔	-	23.0	15.4	11.4	花崗岩	水輪	覆土下層	16世紀後葉 PL10
Q7	宝篋印塔	32.0	17.0	13.6	10.9	花崗岩	相輪	覆土下層	16世紀後葉 PL10

表8 堀跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 重複関係 (古→新)		
				確認長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)							深さ (m)	
1	B2f4区	(N-70°-E)	直線	(20.28)	5.20~ 5.96	0.78~ 1.04	2.96~ 3.48	外傾	平坦	人為	自然	五輪塔	16世紀後半	本跡→SR4・11・ 23~25

4 近世・近代の遺構と遺物

土坑4基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

第3号土坑 (第20・21図)

位置 調査B区中央部のB2f4区、標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径0.70m、短径0.58mの楕円形で、長径方向はN-90°-Wである。深さは24cm、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

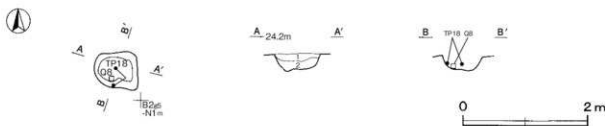
覆土 2層からなり、ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した、人為堆積である。

土層解説

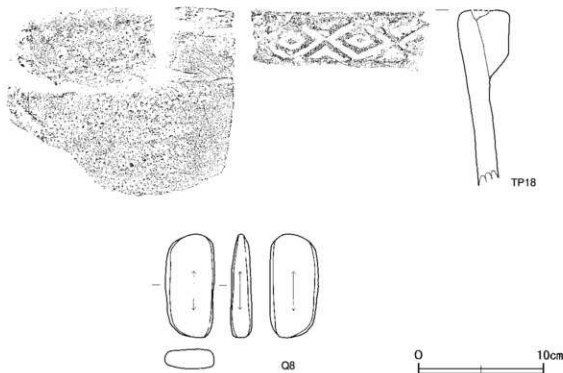
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片21点(甕)、瓦質土器片2点(火鉢)、石器1点(砥石)が出土している。TP18は中央部、Q8は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀後半と考えられる。



第20図 第3号土坑実測図



第21図 第3号土坑出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	手法及び文様の特徴	出土位置	備考

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	砥石	8.2	3.9	1.6	71.0	凝灰岩	紙面4面	覆土下層	PL10

第4号土坑（第22図）

位置 調査B区南西部のB 2h3区、標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第1号堀跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.77m、短径1.49mの楕円形で、長径方向はN-90°-Wである。深さ42cm、底面は平坦で壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

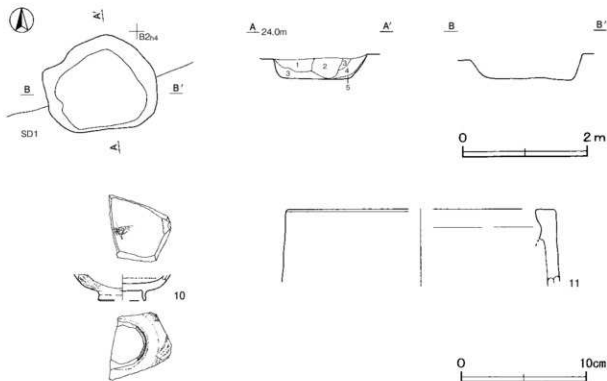
覆土 5層からなる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況を示した、人為堆積である。

土層解説

1	褐色	ロームブロック多量	4	暗褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック多量	5	暗褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子少量			

遺物出土状況 土師質土器片1点（火鉢）、陶器片9点（碗）、磁器片1点（碗）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片5点、土師器片2点、須恵器片1点も出土している。10・11は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀後半と考えられる。



第22図 第4号土坑・出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬	色調	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
10	磁器	碗	-	(21)	[3.6]	灰白	透明釉	灰白	見込みに「寿」の 高台部付近に界線 付に砂目肌	覆土中	19世紀後半 30% PL.9

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
11	土師質土器	火鉢	[21.4]	(6.1)	-	長石・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部内外面横ナデ	覆土中	10% PL.9

第5号土坑（第23図）

位置 調査B区南西部のB 2h3区、標高240mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.21m、短径0.87mの楕円形で、長径方向はN-90°-Eである。深さ53cm、底面は平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

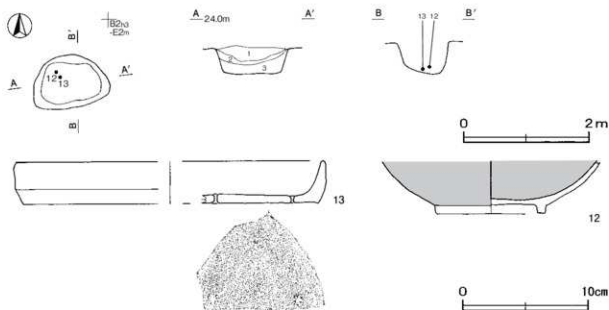
覆土 3層からなり、ロームブロックを含み不規則な堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量 3 暗褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（焙烙）、陶器片1点（皿）が出土している。また、流れ込んだ土師器片3点も出土している。12・13は、北西部覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀後半と考えられる。



第23図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑出土遺物観察表（第23図）

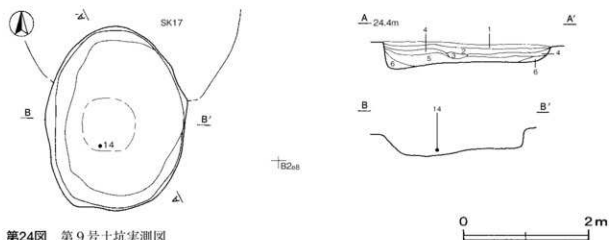
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬	色調	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
12	陶器	皿	-	(4.2)	8.6	にぶい橙	灰釉	暗オリーブ	内外面ロクロナデ 貼付高台 トチン 痕3か所	覆土下層	19世紀後半～20世紀初頭 笠間系 25% PL.9
13	瓦質土器	焙烙	[24.5]	3.4	[23.5]	長石・石英	灰黄褐		内外面ナデ調整 底面2か所焼成後の穿孔	覆土下層	19世紀後半 20% PL.9

第9号土坑（第24・25図）

位置 調査B区北部のB2d7区、標高24.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第17号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.92m、短径2.20mの楕円形で、長径方向はN-0°である。深さは45cmで、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は中央部西側が径90cmほどの皿状で硬化している。



第24図 第9号土坑実測図

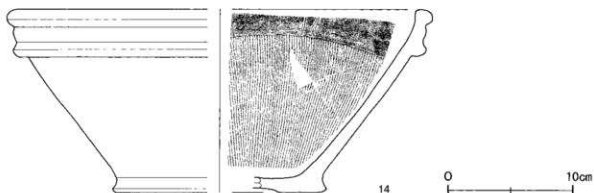
覆土 6層からなり、ロームブロック・焼土ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・砂質粘土少量・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 陶器片8点(皿1・灯明皿1・搦鉢5・甕1)、磁器片4点(碗3・小杯1)、瓦片36点(平瓦)が出土している。14は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀後半から20世紀初頭と考えられる。



第25図 第9号土坑出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
14	陶器	搦鉢	[32.0]	14.6	[16.4]	にぶい赤褐	鉄釉	にぶい橙	普通	口縁部内面・体部外面鉄釉 内面・見込み横り目 口縁外帯三段	覆土下層	19世紀後半～20世紀初頭 等間 25% PL9

表9 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3	B 2f4	N-90°-W	楕円形	0.70×0.58	24	外傾	平坦	人為	陶器片 瓦質土器片	
4	B 2h3	N-90°-W	楕円形	1.77×1.49	42	緩斜	平坦	人為	土師質土器片 陶器片	SD1→本跡
5	B 2h3	N-90°-W	楕円形	1.21×0.87	53	緩斜	平坦	人為	土師質土器片 陶器片	
9	B 2d7	N-0°	楕円形	2.92×2.20	45	緩斜	平坦	人為	陶器片 磁器片 瓦片	SK17→本跡

5 その他の遺構と遺物

土坑17基、溝跡2条、不明遺構2か所が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑 (第26・27図)

ここでは、時期及び性格が不明な土坑17基について、実測図と一覧表に掲載する。

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第6号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第12号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第15号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第16号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第23号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第24号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量

第25号土坑土層解説

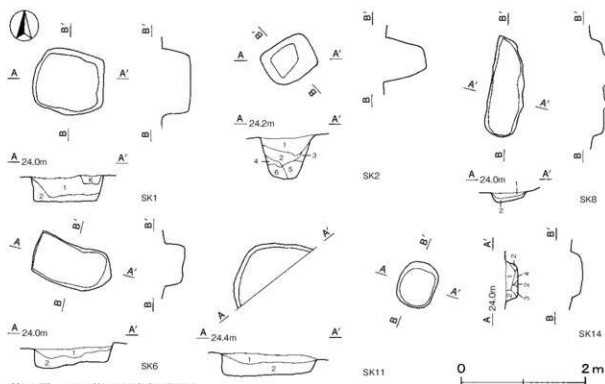
- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第26号土坑土層解説

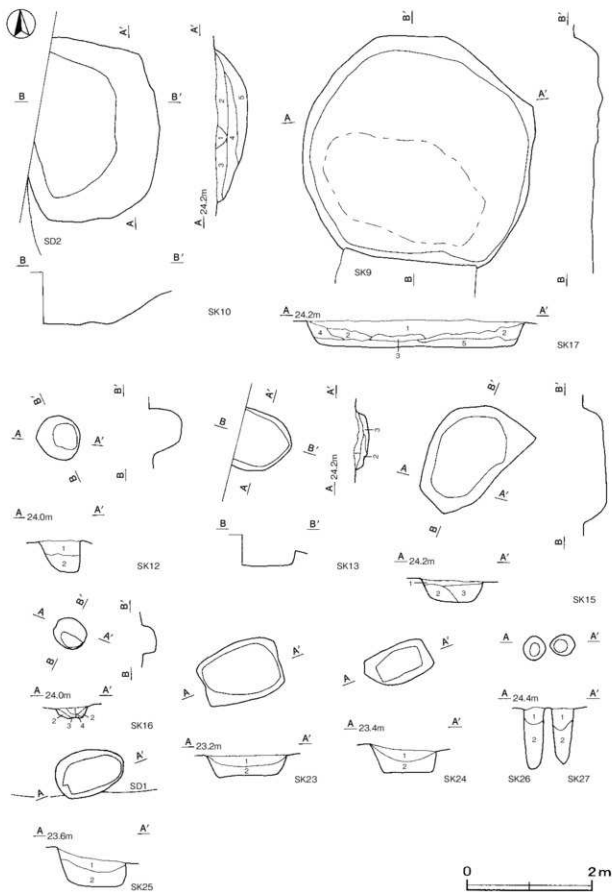
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子微量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量



第26図 その他の土坑実測図(1)



第27図 その他の土坑実測図②

表10 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	B 2 c 4	N-90°-W	隅丸方形	1.13×1.05	43	外傾	平坦	人為	
2	B 2 g 5	N-55°-E	隅丸長方形	0.85×0.66	68	外傾	平坦	人為	
6	B 2 c 5	N-70°-E	不整楕円形	1.31×0.67	33	外傾	凹凸	人為	
8	B 2 c 3	N-6°-W	不整楕円形	1.58×0.55	26	外傾	凹凸	人為	
10	B 2 c 3	N-4°-W	[不整楕円形]	(3.05)×2.20	40	縦斜	皿状	人為	SD 2→本跡
11	B 2 g 6	N-38°-W	[楕円形]	1.50×(0.63)	36	外傾	平坦	人為	SD 1→本跡
12	B 2 h 2	-	円形	0.71	52	外傾	皿状	人為	
13	B 2 b 3	N-14°-E	[楕円形]	0.99×(0.85)	50	縦斜	凹凸	人為	
14	B 2 c 4	N-28°-E	楕円形	0.74×0.60	18	外傾	平坦	人為	
15	B 2 f 5	N-39°-E	不整楕円形	1.80×1.22	27	縦斜	凹凸	人為	
16	B 2 d 5	N-41°-W	楕円形	0.52×0.45	22	外傾	平坦	人為	
17	B 2 d 7	-	円形	3.64	46	縦斜	平坦	人為	本跡→SK 9
23	B 2 i 3	N-69°-E	隅丸長方形	1.12×0.74	37	縦斜	平坦	人為	SD 1→本跡
24	B 2 i 3	N-66°-E	隅丸長方形	1.05×0.60	46	外傾	平坦	人為	SD 1→本跡
25	B 2 i 3	N-72°-E	楕円形	1.26×0.92	46	外傾	平坦	人為	SD 1→本跡
26	C 1 g 9	N-0°	円形	0.53	98	外傾	皿状	人為	
27	C 1 g 9	N-90°-W	楕円形	0.40×0.34	87	外傾	皿状	人為	

(2) 溝跡(第28図・全体図)

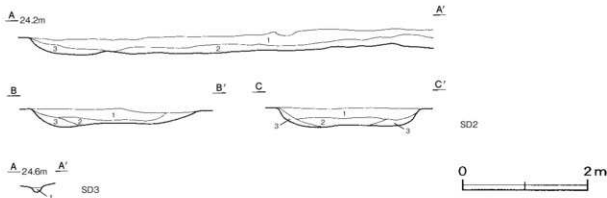
ここでは、時期及び性格が不明な溝跡2条について、実測図と一覧表で掲載する。

第2号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第3号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量



第28図 第2・3号溝跡実測図

表11 溝跡一覧表

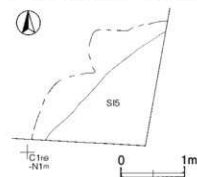
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な 出土遺物	時代	備考 重複関係(古→新)
				確認長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)						
2	B 2 c 3-B 2 e 4	N-16°-W	直線	2.87	1.82~2.84	1.48~2.50	28	縦斜	平坦	自然	土師器片	-	本跡→SK10
3	C 1 e 7-C 1 e 8	N-83°-E	直線	(2.15)	0.05~0.14	0.02~0.08	10	縦斜	平坦	人為	-	-	SI 2→本跡

(3) 不明遺構 (第29・30図)

耕作による削平のため壁の立ち上がりがなく、硬化面もしくは、炉と硬化面のみを確認した。以下、その概要について記述する。

第1号不明遺構 (第29図)

位置 調査C区南東部のC 1g9区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。



重複関係 第5号住居跡を掘り込んでおり、その覆土上面が踏み固められている。

規模と形状 東部と南部は調査区域外へ延びている。耕作により削平され、壁の立ち上がりは認められないが、東西1.80m、南北は2.00mで、不整形の硬化面が確認された。

所見 時期及び性格は、不明である。

第29図 第1号不明遺構実測図

第2号不明遺構 (SI1) (第30図)

位置 調査C区東部のC 1f9区、標高24.0mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 東側が調査区域外へ延びている。耕作により削平され、壁の立ち上がりは認められないが、炉及び炉の周辺に東西1.50m、南北2.00mの範囲で硬化面が確認された。

炉 2か所。炉1は南部、炉2は中央部が攪乱を受けている。炉1は径40cmで床面を4cmほど、炉2は径50cmで床面を7cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

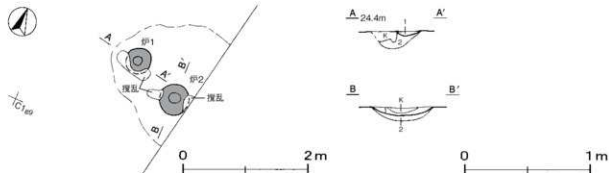
炉1土層解説

- 1 灰赤色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 明赤褐色 焼土ブロック中量

炉2土層解説

- 1 灰赤色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 明赤褐色 焼土ブロック中量

所見 時期及び性格は不明であるが、炉にともなう硬化面から住居跡の可能性が考えられる。



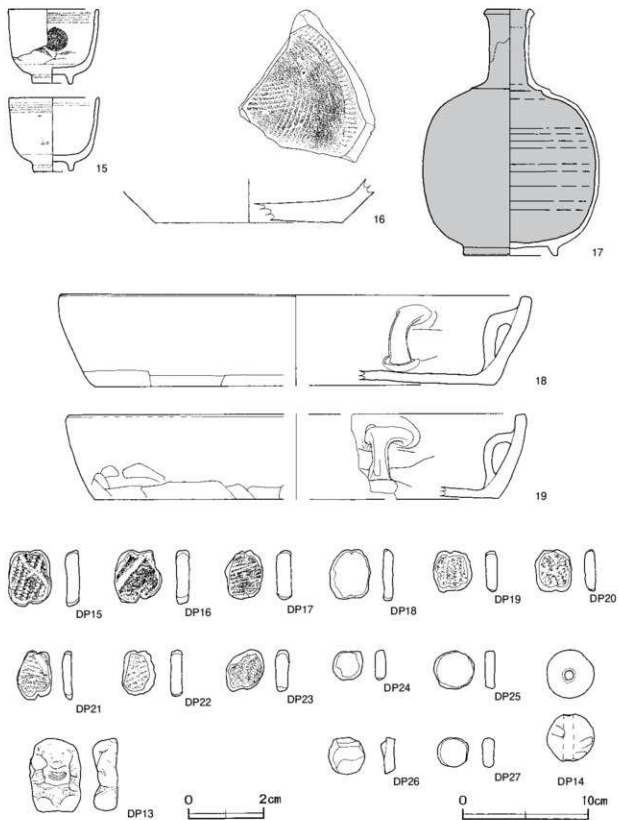
第30図 第2号不明遺構実測図

表12 不明遺構一覧表

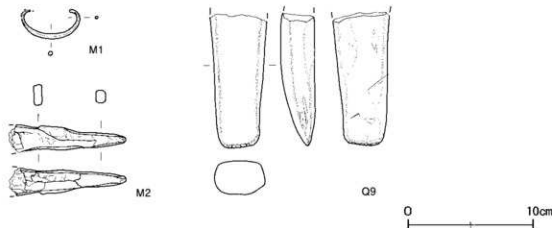
番号	位置	長軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な 出土遺物	時代	備考 重複関係 (古→新)
								土柱穴	出入口 ピット	ピット	炉				
1	C 1g9	-	[不整形]	(2.00×1.80)	-	平坦	-	-	-	-	-	-	-	不明	SI5→本跡
2	C 1f9	-	[楕円形]	(2.00×1.50)	-	平坦	-	-	-	2	-	-	-	不明	

(4) 遺構外出土遺物 (第31・32図)

ここでは、今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを抽出して、実測図と遺物観察表で掲載する。



第31図 遺構外出土遺物実測図(1)



第32図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第31・32図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	釉薬	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
15	磁器 碗	7.0	5.9	3.2	灰白	透明釉	灰白	良好	柴付	口縁部・高台部に墨線 雲文	SD1覆土 中層	肥前系 19世紀末～ 20世紀初頭 80% PL.7
16	陶器 鉢鉢	-	(3.5)	[14.8]	明赤陶	鉄釉	暗赤釉	普通	普通	内面・見込み目目	SD1覆土 中層	明石・堺系 PL.9
17	陶器 瓶類	3.3	19.7	7.4	濁灰	灰釉	灰オリーブ	普通	普通	内外面ロクロナデ 頸部貼付 口縁部 龍白釉 外面灰釉 内面鉄釉	SD1覆土 中層	相馬系 19世紀 60% PL.7

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
18	瓦葺土器	焙壺	36.4	7.5	[31.9]	長石・雲母・砂粒	にい黄橙	普通	内耳2か所残存 内外面 ナデ調整	SD1覆土 中層	18世紀後半～19世紀前半 45% PL.7
19	瓦葺土器	焙壺	[36.2]	6.8	[32.2]	長石・雲母・砂粒	灰黄	普通	内耳2か所残存 内外面 ナデ調整	SD1覆土 中層	18世紀後半～19世紀前半 15% PL.7

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	胎土	色調	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
DP13	泥面子	1.85	1.35	0.65	1.52	粘土	明赤陶	大黒様	SD1覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
DP14	土玉	3.8	3.7	0.7	49.4	粘土	ナデ調整 中央部一方向からの穿孔	C区表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	現存率 (%)	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
DP15	土器片鉢	4.5	3.4	1.1	21.2	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	C区表土	
DP16	土器片鉢	4.2	3.7	1.1	16.5	100	長軸両端に挟り入り部を作出 沈線文	C区表土	PL.9
DP17	土器片鉢	3.8	3.1	1.2	16.1	100	長軸両端に挟り入り部を作出 条縄文	C区表土	PL.9
DP18	土器片鉢	4.0	3.3	0.7	13.2	100	長軸両端に挟り入り部を作出 無文	C区表土	PL.9
DP19	土器片鉢	3.3	3.0	0.9	11.5	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	C区表土	PL.9
DP20	土器片鉢	3.3	2.9	0.9	11.8	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文RL	C区表土	PL.9
DP21	土器片鉢	3.8	2.7	0.7	10.0	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文LR	C区表土	PL.9
DP22	土器片鉢	3.6	2.7	0.9	10.2	100	長軸両端に挟り入り部を作出 単節縄文LR	C区表土	PL.9
DP23	土器片鉢	3.3	3.0	1.1	11.2	100	長軸両端に挟り入り部を作出	C区表土	PL.9
DP24	土器片鉢	2.3	2.3	0.9	6.5	100	長軸両端に挟り入り部を作出	C区表土	PL.9
DP25	土器片円盤	3.0	3.2	0.8	10.2	100	周縁部研磨 無文	C区表土	PL.9
DP26	土器片円盤	3.0	3.0	1.2	9.4	100	隆帯貼付	C区表土	PL.9
DP27	土器片円盤	2.4	2.4	1.0	6.3	100	周縁部研磨 無文	C区表土	PL.9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	磨製石斧	(10.7)	4.5	2.7	(196.3)	凝灰岩	器体研磨	C区表土	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
M1	引き手	2.30	4.25	0.2 ~ 0.4	(284)	銅	両端部彎曲	SD1覆土上層	
M2	小刀*	(9.35)	2.20	0.7 ~ 0.8	(3290)	鉄	基部欠損	SD1覆土中	PL10

第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の住居跡3軒、袋状土坑4基、土坑1基、地点貝塚1か所、古墳時代の住居跡1軒、土坑1基、中世の堀跡1条、近世・近代の土坑4基、時期不明の土坑17基、溝跡2条、不明遺構2か所を確認した。また、これらの遺構からは、各時代を特徴付ける土器や石製品などが出土している。ここでは、当遺跡の主体である中世の城郭三村城を中心に、縄文時代と中世の概要を述べまとめとする。

1 縄文時代

中期の袋状土坑4基が確認されている。袋状土坑については、調査面積が狭いことから集落や住居との関係については明確につかめないが、当遺跡の南側には縄文時代の遺跡として宿平遺跡が位置することから、集落は調査区南側へ広がっていると推測される。

2 中世

(1) 大掾氏と三村城

大掾氏は、茨城県南西部を中心に大きな勢力を扶植した平維幹の子孫の馬場資幹が常陸大戦に就任して以降、常陸平氏の宗家として常陸大掾職を世襲し、中世常陸の名族として長く威望を誇ってきた。

三村城は、大掾常春の居城と伝えられている。三村城は中世の府中にとって小田氏などの進軍に対する南側の軍事的拠点であったとされ、天正年間に築城され落城したと伝えられている¹⁾。

(2) 三村城跡の立地と構造 (第33・34図)

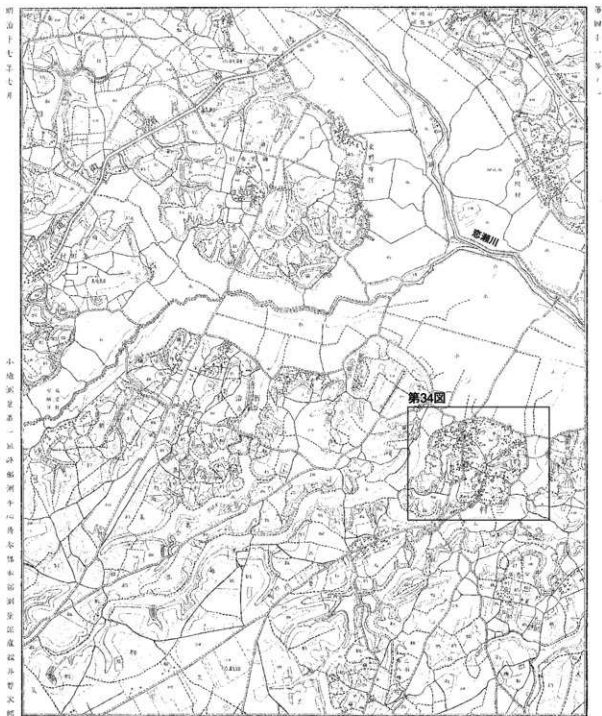
三村城跡は恋瀬川右岸の台地上に位置しており、現在の三村小学校を中心とする一帯が城域といわれている。台地は、南西部の台地基部を除いて周囲を谷津田に囲まれ、周囲から入り込む小支谷によって開析されている。

三村城跡の構造は、現地踏査と地名の照合によって一郭から三郭まで確認した²⁾。

一郭は、標高22mほどの舌状台地北端で、御城という小字名が残る。一郭北側には根子屋、根子屋下、南東側には諸子久保という小字名が残る。家臣団の居住区と考えられる。北側斜面部は急傾斜になっている。東側の斜面はなだらかで、一郭へ登る道はクランク状に曲がり、両側に平場をとまなっている。南側斜面部には腰曲輪が設けられている。

二郭は、一郭南西側の標高25mほどの台地上に位置する。館という小字名が残る。北側の平場は一段高くなっている。北東部には腰曲輪が設けられている。普門寺が位置する南側に延びる台地部には、郭としての明確な痕跡は確認できないが、城の構造から南北に延びる台地全体が、二郭と考えられる。二郭の東側と南東側には標高20mほどの小舌状台地が延びている。その小舌状台地上には平場や斜面部に腰曲輪と考えられる平垣部も見られ、郭の存在も想定できるが明確ではない。

茨城縣常陸國新治郡三村



明治前期測量 2万分1フランス式彩色地図

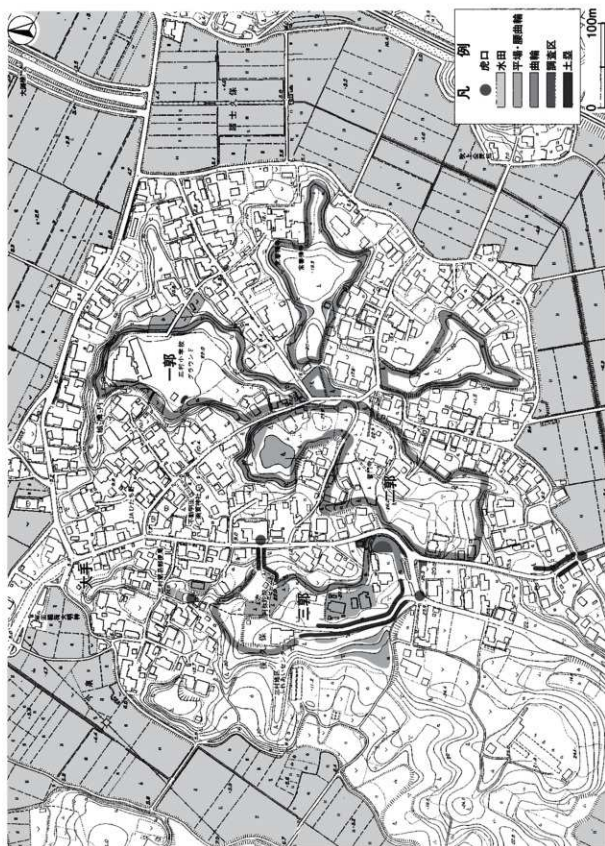
土浦北部地区169(1班41号1測板)

この地図は建設省土地院院長の承認を得て、同院所蔵の第一等原簿を二万から一万分の縮尺で複製したものである。

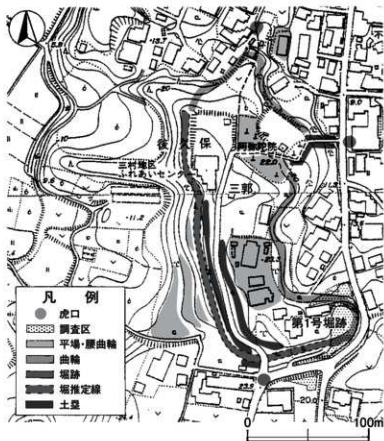
(財)日本地図センター発行

(承認番号 平6地測 第1号)

第33図 明治前期測量 茨城県常陸國新治郡三村図



第34図 三村城跡想定図



第35図 三村城跡想定図 三郭部拡大図

院への入り口にあたり、道路の両側には平場が設けられている。三郭の南端部は土塁をともなう食違い虎口になっている。

第1号堀跡は、三郭の南東部に位置し、食違い虎口から東に50mほどのところで、箱葉研状を呈した幅6.0m、深さ3.5mで、東西に長さ20mほどが確認された。堀跡は西側に伸びていると推定され、台地の西側縁部で北向きに方向を変えて、三郭の西側を周回するようにその痕跡が確認できる。三郭の西側斜面部には、数段の腰曲輪が設けられ、堀と土塁によって守りを固めている。

三郭は、南側に伸びる台地尾根と標高差がないことや、南側からの進入路の正面にあたることから、守りを固める必要性があったと考えられる。今回の調査で確認された第1号堀跡は、三郭の南側に伸びる台地尾根部を掘り切り、虎口に付随する堀といえる。

3 小結

調査の結果、当遺跡が縄文時代から中・近世の複合遺跡であることが明らかになった。確認された堀跡は、出土物からも三村城が機能していた時期と一致する。また、三郭南側は、台地尾根と標高差はないが、土塁と堀が構築され守りは堅固であったといえる。

註

- 1) 石岡市史編さん委員会「石岡市史 中巻1」1983年3月
- 2) 郭の範囲は、地形や城の構造から推定線で示した。

二郭の南側には、古道という小字名が残り、現在の古道公民館がある南側の台地から北へ向かって道路が伸びている。この道路は、城内への南からの進入路にあたると思われる。入り口の両側に土塁が残り、木戸口であったと考えられる。

三郭は、標高24mほどで、大手から舌状台地中央部に入り込む小支谷を挟んで、一郭・二郭の西側に対峙するように位置している。台地は南側を除いて周囲を斜面に囲まれている。郭の西側には南北に道路が伸び、北側は低地部にある大手方面に向かって傾斜している。傾斜した道路は細くクランク状に曲がり、途中に平場を設けている。北東側には、入り口両側に土塁をともないクランク状に曲がる傾斜した道路が西側の道路へと伸びている。現在の阿弥陀



第35图 三村城跡全体图

写 真 图 版

第3号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
遺物出土状況



PL2



第 5 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 18 号 土 坑
完 掘 状 況



第 18 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 19 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 20 号 土 坑
完 掘 状 况



第 22 号 土 坑
完 掘 状 况



PL4



第 22 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 9・17 号 土 坑
完 掘 状 况

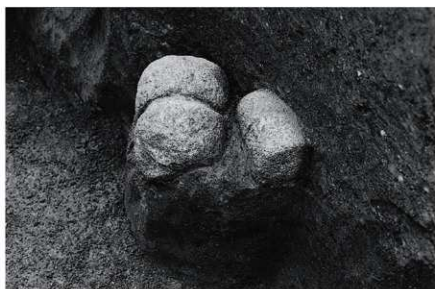


第 9 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况

第 1 号 堀 跡
完 掘 状 况

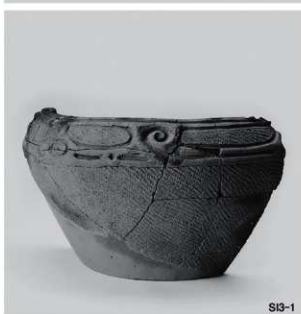


第 1 号 堀 跡
遺 物 出 土 状 况



第 1 号 堀 跡
土 層 断 面





第3・4号住居跡，第18・19号土坑出土遺物



SI2-8



SK7-9



SI2-7



SI2-6



遺構外-19



遺構外-15



遺構外-18

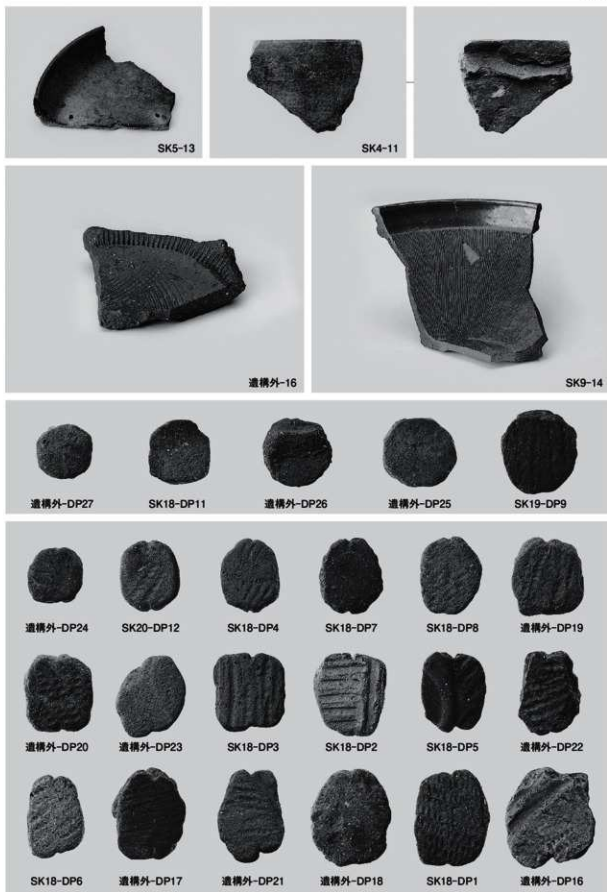


遺構外-17

第2号住居跡，第7号土坑，遺構外出土遺物



第3·5号住居跡，第3·19·20·21·22号土坑拓本土器



第4・5・9・18・19・20号土坑，遺構外出土土器，土製品

PL10



第4号住居跡, 第3号土坑, 第1号堀跡, 遺構外金属製品, 石器・石製品

茨城県教育財団文化財調査報告第299集

三 村 城 跡

一般県道飯岡石岡線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成20(2008)年3月19日 印刷
平成20(2008)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6387

印刷 株式会社 あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号
TEL 029-227-5505